

高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替

——心理的ストレス反応との関連にも注目して——

大谷 宗啓*

本研究は、高校生・大学生を対象に、従来、深さ・広さで捉えられてきた友人関係について、新観点「状況に応じた切替」を加えて捉え直すことを試み、その捉え直しが有意義なものであるかを質問紙調査により検討した。因子分析の結果、新観点は既存の観点とは因子的に弁別されること、新観点は深さ・広さの2次元では説明できないものであることが確認された。また重回帰分析の結果、新観点追加により友人関係から心理的ストレス反応への予測力が向上すること、新観点による統制の有無により既存観点と心理的ストレス反応との関連に差異の生じることが明らかとなった。

キーワード：状況に応じた切替, 友人関係, 対人関係, コミュニケーション, 青年期

問題と目的

現代青年は対人関係が希薄化し、自己開示や傷つき・傷つけられることを避け、表面的で円滑な関係を求める傾向が高まっていると指摘されてきた(e.g. 和田, 1990)。そうした希薄化論に対し、対人フリッパー論(辻, 1999b)や選択的コミットメント論(浅野, 1999)は、友人関係には、関係の深さ・広さとは独立して、状況に応じて自己や付き合い合う相手を切り替える傾向(以下「状況に応じた切替」)が存在しているにもかかわらず、それらを混同してきた結果ミスリードを生んでいると指摘する。これらの論は量的研究の結果として提示されたこともあり、広く隣接諸領域で注目された(e.g. 大坊, 2003; 富田, 2000)。

友人関係が深さ・広さの2次元で整理されることは一般的に言われているだけでなく、調査研究でも実証されてきた(落合・佐藤, 1996; 小塩, 1998)。しかしそうした研究を振り返ると、状況に応じた切替に相当する項目が2次元の原点付近にプロットされた例があり(長沼・落合, 1998; 岡田, 1993)、3次元目を設定しうる可能性も指摘されている(伊藤, 1999)。類似の付き合い方が再三「近年の傾向」として報告されてきたことから(e.g. 香山, 2004; リフトン, 1971; 小此木, 1980)、こうした付き合い方が従来の図式では捉え難い取りこぼし部分であった可能性はある。また、従来の2次元での整理は友人関係のあり方を通状的に捉えているが、状況的影響に対する個人の行動の感受性の違いを考慮することは必要である(クラエ, 1996)。

これらを踏まえると、前掲辻(1999b)らのように状況に応じた切替に注目して友人関係を捉え直すことは有意義な試みである。しかし研究数・情報量とも少なく、項目数を増やしての因子分析の必要(辻, 1999a)も指摘されたまま進んでいない。従って、状況に応じた切替が深さ・広さと因子的に弁別されるのか定かではない。また、従来通り深さ・広さで捉えた場合と、切替という観点を入れて捉え直した場合とを対比させた報告はないため、捉え直しの意義を実証的に論じることはできないのが現状である。

そこで本研究ではまず、友人関係を深さ・広さの2次元で整理する既存尺度に新観点「状況に応じた切替」についての項目を追加して実施した。因子分析により既存観点・新観点的因子的弁別性を確認することにより、新観点「状況に応じた切替」を深さ・広さと区別して友人関係を捉え直すこと(以下「捉え直し」)が可能であるか検討することを第1の目的とする。

次に、新観点を含む新規尺度と既存尺度とを他の変数との関連において対比することにより、捉え直しを行う積極的な意義を検討することを第2の目的とする。対比には心理的ストレス反応経験頻度を用いた。少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議(2001)に見るように、教育現場では「希薄な友人関係」はストレスをもたらすものとして問題視され、指導・支援の手掛かりとなっている。もし捉え直しにより心理的ストレス反応経験頻度をより良く予測できるなら、あるいは新観点導入により既存観点とストレスとの関連が変化し、前掲辻(1999b)らの言うミスリードの存在が裏付けられるならば、捉え直しは単に可能なだけでなく教育実践に係わる積極的意義を有すると言える。

* 関西大学大学院社会学研究科
schatten@aqua.ocn.ne.jp

研究対象は高校生・大学生である。その理由は、対人フリッパーや選択的コミットメントの調査が16歳以上の青年を対象に行われてきたこと、また中学生以下では交友範囲が学級内に限られる傾向があること(藤田・伊藤・坂口, 1996)である。

ところで、状況に応じた切替とはどのように捉えられるであろうか。対人フリッパー論では、「テレビのスイッチを切り替えるように、場面場面に合わせて気軽にスイッチを切り替えられる対人関係のあり方」を「対人関係フリッパー」と定義した上で、付き合う友人を変える「関係切替志向」と、自分のキャラクターを切り替える「ペルソナ切替志向」とを分けてきた(辻, 1999a)ことから、本研究でもそれを踏襲する。また選択的コミットメント論では、抽出された3次元目「状況志向」は、対人フリッパー論でのペルソナ切替志向に相当する「自己の複数性(多元性)」の他にも、複数の友人関係が相互に重なり合わないようにする「関係の相互隔離」、その都度の関係に没入する「その都度の没入」を意味するものと解釈されている(浅野, 1999)。但し「その都度の没入」については強い複数負荷が示されていたため(浅野, 1995)、今回の調査では「関係の相互隔離」のみを取り上げた。また、切り替えが意図的であるか否かによる違いも考えられるが、質問紙法による内観報告で求めるには難しい区別であり、社会的望ましさによる回答の歪みも危惧されたため、今回の調査では区別せずに問うた。

以上のように本研究では、状況に応じて複数の関係対象を切り替える「対象切替」、複数の自己を切り替える「自己切替」、複数の関係間の相互隔離「関係の相互隔離」の3つの下位概念から新観点「状況に応じた切替」を捉えた。

方 法

1. 調査の概要

2004年7月、近畿地区の公立高校3校、国立大学1校、東海地区の私立大学1校の計1207名を対象とし、無記名式の質問紙調査を行った。高校では授業担当者、大学では調査者により集団的に実施、所要時間は約15分であった。分析には回答漏れのない999名(校種・性別の内訳はTABLE 1に示した)を用いた。

2. 質問紙の構成

(1) 友人関係

状況に応じた切替を測る新観点項目は、浅野(1995)、辻(1999a)を参考に25項目を作成、青年心理学を専門とする研究者1名および現職教諭5名と協

TABLE 1 分析対象人数構成

	高1	高2	高3	大1	大2	大3	大4	不明	計
男子	80	97	19	101	33	23	8	6	367
女子	221	126	14	159	55	44	9	2	630
不明	0	0	0	2	0	0	0	0	2
計	301	223	33	262	88	67	17	8	999

議・改良の上、合意に至った18項目(APPENDIX参照)を用いた。この18項目と落合・佐藤(1996)の35項目¹とを合わせた計53項目をシャッフルして配列。「あなたの、同性の友人²(親友, それ以外の友人を含めます)との普段の付き合い方で、各項目はどれくらいあてはまりますか。」と教示し、「7. 非常にあてはまる」、「6. だいぶあてはまる」、「5. どちらかというにあてはまる」、「4. どちらともいえない」、「3. どちらかというにあてはまらない」、「2. ほとんどあてはまらない」、「1. 全くあてはまらない」の7件法で回答を求めた。

(2) 心理的ストレス反応経験頻度

鈴木・嶋田・三浦・片柳・右馬楚・坂野(1997)のSRS-18(Stress Response Scale-18)を、4月以来の経験頻度を問う形式に改変³して使用。「あなたは、この4月以降、各項目の状態がどれくらいありますか。」と教示し、「4. よくある」、「3. たびたびある」、「2. あまりない」、「1. ほとんどない」の4件法で回答を求めた(項目はTABLE 6参照)。

3. 分析の手順

友人関係の設問53項目から、落合・佐藤(1996)の35項目のみによる尺度(以下「ベース尺度」と)、新観点項目を含めた尺度(以下「新規尺度」)の2通りを構成し、因子構造を確認する。次に重回帰分析により、両尺度から心理的ストレス反応経験頻度への予測力、および関連の様相を比較する。

結果と考察

1. ベース尺度の構成

友人関係53項目の内、落合・佐藤(1996)の35項目のみから構成した。天井効果の明らかな項目9を除く34項目に対し、最尤法による因子分析を行い、挟み込

¹ 他の設問との兼ね合いから原典での「友達」との表現を「友人」に変更、また調査協力校からの事前要請により一部補語やルビを追加した。

² 同性友人に限定した理由は、同性・異性を込みにして問うた場合、一般的に異性間でのみ共有される活動の存在により「対象切替」が過剰に報告されることが危惧されたためである。

³ 「ここ2、3日」の経験を問う原典の形式は直近のストレスサー・イベントの有無の影響が大きく今回の使用目的には合致しないため改変した。

み法(堀, 2004)により6~10因子解から6因子解を採用, Promax回転を施した。因子パターンの最大値が.30に満たない項目を順次除外し, 最終的に31項目を採用した。各適合度指標の値も充分なものが得られ

た(TABLE 2)⁴。原典での低負荷項目(項目40, 46)が移動した以外, 原典通りの因子構造が再現された。因子の解釈と命名は落合・佐藤(1996)に従い, 第1因子「防衛的」(以下「F1:防衛的」。第2因子以降も同じ), 第2因子

TABLE 2 ベース尺度 一次因子分析($n=999$)

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	h^2
F1: 防衛的 ($\alpha = .77$)							
10. 友人と本音で話すのは避けている	.78	.04	.04	.03	.01	-.08	.60
8. 友人に自分のすべてをさらけ出すのは危険である	.74	.13	.05	.01	.03	-.02	.50
17. 友人にはありのままの自分は出せない	.73	.00	.00	.06	.09	-.02	.55
2. 友人とは本音で話さないほうが無難だ	.68	.04	-.01	.13	.03	-.10	.43
28. 傷つきたくないのに, 友人には本当の姿を見せられない	.66	-.11	.11	-.05	.10	-.01	.59
36. 友人には自分の考えていることを全部言う必要はない	.57	.08	-.10	.00	-.22	.18	.29
25. 友人とは, 互いに傷つくような本音での話はしないようにしている	.55	.07	.04	-.06	.09	.08	.33
34. 友人とは何でも本音で話し合うようにしている	-.50	.27	.14	.03	.25	.04	.46
41. 自分が自信をなくされるくらいなら, 友人とかかわらないほうがいい	.36	.07	-.16	-.01	.18	.02	.20
50. 友人と分かり合おうとして傷つきたくない	.31	-.08	.01	-.18	.19	.17	.33
F2: 自己自信 ($\alpha = .83$)							
13. 友人と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない	.12	.81	-.05	-.01	-.03	.02	.62
20. 友人と本音でぶつかり合っても, 自信をなくしてしまうことはない	.06	.78	-.06	-.01	.02	-.01	.58
4. 友人と意見が対立しても, 自信を無くさないで話し合える	-.05	.75	-.06	-.04	.03	.01	.56
29. 友人と意見を交わしあっても, それほどまどわされない	.14	.64	.05	-.06	-.10	-.07	.40
40. みんなと意見が違っても, できるだけ自分の意見を言うようにしている	-.06	.45	.04	.11	-.15	.08	.36
38. 友人と本音でぶつかり合っても平気である	-.27	.43	.00	.16	-.01	.01	.47
F3: 全方向的 ($\alpha = .64$)							
18. どんな人とも仲良くしようと思う	.02	-.02	.81	.00	-.11	.05	.65
1. どんな友人とも仲良しでいたい	.02	-.07	.77	-.03	-.06	.03	.59
27. どんな人ともずっと友人でいたい	.01	.07	.76	.00	.07	-.01	.60
35. どんな友人とも協調し合いたい	-.01	-.01	.59	.06	.11	.12	.51
42. いやだなと思っている人とはつきあわないようにしている	.09	.07	-.32	.01	.01	.15	.09
F4: 積極的相互理解 ($\alpha = .80$)							
6. 友人と分かり合おうとして傷ついても仕方ない	.09	-.03	-.04	.86	.05	-.04	.65
15. 友人と本音を言い合うことで, 傷ついても仕方がない	.06	-.10	-.02	.86	-.09	-.01	.65
23. 友人と本当の姿を見せ合うことで, 少くく傷ついてもかまわない	-.12	.11	.06	.56	.04	.05	.47
31. 友人とは少くく傷ついても本当のことを言い合いたい	-.26	.13	.09	.41	.05	.07	.44
F5: 同調 ($\alpha = .75$)							
7. みんなと何でも同じでいたい	.00	.04	.04	-.03	.78	-.05	.60
16. みんなと違うことはしたくない	.05	-.07	-.05	.00	.74	-.05	.59
32. みんなと意見を合わせようと思う	.06	-.19	.04	-.02	.53	.07	.46
46. 友人に自分を理解してもらえないと自信がもてない	.07	-.21	-.10	.12	.35	.24	.29
F6: 被愛願望 ($\alpha = .88$)							
24. みんなから愛されたい	.00	.01	.01	.02	.02	.90	.83
51. みんなに好かれていたい	.01	-.02	.03	-.04	-.02	.85	.74
因子寄与	5.14	4.26	3.40	3.54	3.27	2.87	
因子間相関	F01	F02	F03	F04	F05	F06	
F01	1.00	-.34	-.17	-.43	.28	-.16	
F02	-.34	1.00	-.07	.40	-.37	-.09	
F03	-.17	-.07	1.00	.16	.31	.53	
F04	-.43	.40	.16	1.00	-.14	.14	
F05	.28	-.37	.31	-.14	1.00	.26	
F06	-.16	-.09	.53	.14	.26	1.00	
$\alpha = .63$	RMSEA =	.04					
回転前の累積寄与率は 58.72%	GFI =	.94					
	AGFI =	.90					
	CFI =	.96					

「自己自信」、第3因子「全方位的」、第4因子「積極的相互理解」、第5因子「同調」、第6因子「被愛願望」と名付けた。

続いて原典同様、回帰法により推定した因子得点を行列として最尤法による二次因子分析を行った。挟み込み法により2因子解のみ適当と判断されたため2因子解を採用、Promax回転を施した(TABLE 3)。原典同様の複数負荷を示した「F5：同調」が移動した以外、原典通りの因子構造が再現された。因子の解釈と命名は落合・佐藤(1996)に従い、第1二次因子「深さ」(以下「FF1：深さ」、第2二次因子以降も同じ)、第2二次因子「広さ」と名付けた。紙数の都合から詳しい結果は省くが、一次因子分析と二次因子分析の結果を元に高次因子分析モデルを構成し検証的因子分析を行ったところ、モデルの適合度は、RMSEA=.06, GFI=.88, AGFI=.86, CFI=.88と許容されうる範囲の値が得られ、探索的二次因子分析で得られた因子構造のデータへのあてはまりの良さが確認された。

このように新観点項目を挿入し配列順が変わっても原典通りの結果が再現されたことは、落合・佐藤(1996)の35項目が堅牢な因子構造をもつことを示しており、新規尺度の比較評価のベースとして用いるのに適当な尺度であることが確認された。

2. 新規尺度の構成

新観点項目を含む全53項目から構成した。天井効果の明らかな項目9を除く52項目に対し、最尤法による因子分析を行い、挟み込み法により6~12因子解から11因子解を採用、Promax回転を施した。因子パター

ンの最大値が.30に満たない項目を順次除外し、最終的に43項目を採用した。各適合度指標の値も充分なもの得られた(TABLE 4)。項目の移動がない第1~4因子、第6因子、第8因子の解釈と命名はベース尺度に倣い、「F01：防衛的」、「F02：自己自信」、「F03：全方位的」、「F04：積極的相互理解」、「F06：同調」、「F08：被愛願望」と名付けた。第5因子には、下位概念「自己切替」として作成した項目のみが揃ったため、「F05：自己切替」と名付けた。第7因子には、下位概念「関係の相互隔離」として作成した項目群の逆項目と、ベース尺度「F1：防衛的」の逆項目34が高い因子パターンを示した。項目内容から、どんな時にも密接な関わりをもつ、自他が一体化した付き合い方を表すものと解釈、「F07：一体化」と名付けた。新観点項目の内、下位概念「対象切替」として作成した項目群は、ベース尺度「F5：同調」の項目、および、ベース尺度「F1：防衛的」の項目を巻き込む形で第9因子と第10因子とに分かれ、因子間相関も低かった($r=.06$)。項目内容を見直すと、第9因子は長沼・落合(1998)や香山(2004)にみられるような目的別の切替であり、第10因子は対人葛藤状況への対処としての「状況離脱方向」(梶田, 1970)に類するものとして区別されると考えられる。そこで第9因子を「F09：目的別対象切替」、第10因子を「F10：状況離脱」と名付けた。第11因子は全て異なるベース尺度項目から構成された。項目内容から、衝突事態を回避しながら付き合いおうとする傾向を表すものと解釈、「F11：衝突回避」と名付けた。なおF09~F11は α 係数が.40~.52と低いが、他の因子と意味内容的に区別されること、ベース尺度での低負荷項目を巻き込む形で抽出されること、後述の心理的ストレス反応との関連においても他の因子とは異なる結果が示されること、および本研究の探索的性格を考慮して区別した。

続いて、ベース尺度と同じ手法にて二次因子分析を行った。挟み込み法により3~5因子解から3因子解を採用、Promax回転を施した(TABLE 5)。第1二次因子には、「F01：防衛的」と、「F09：目的別対象切替」、「F05：自己切替」、「F10：状況離脱」、「F11：衝突回避」が分類された。当該一次因子の項目を見ると、ベース尺度では「F1：防衛的」に分類された項目群と、新規作成項目が殆どを占めている。そこで防衛的な付き合い方や、状況に応じた切替を表す二次因子であると解釈、「FF1：防衛・切替」と名付けた。第2二次因子には、「F07：一体化」、「F03：全方位的」、「F08：被愛願望」が分類された。基本的にベース尺

TABLE 3 ベース尺度 二次因子分析 ($n=999$)

	FF1	FF2	h^2
FF1:「深さ」			
F1: 防衛的	-.69	-.17	.50
F2: 自己自信	.67	-.18	.49
F4: 積極的相互理解	.65	.18	.45
F5: 同調	-.50	.48	.49
FF2:「広さ」			
F3: 全方位的	.08	.82	.67
F6: 被愛願望	.07	.73	.53
因子寄与	1.61	1.52	
因子間相関	FF1	FF2	
	FF1	1.00	-.01
	FF2	-.01	1.00

回転前の累積寄与率は67.81%

4 校種・性別に分析しても同様の因子構造が得られることを確認し、一括での分析結果を用いた。以下の因子分析も同様である。

TABLE 4 友人関係新規尺度 一次因子分析 (n=999)

	F01	F02	F03	F04	F05	F06	F07	F08	F09	F10	F11	h ² (ベース尺度では)	
F01: 防衛的' ($\alpha = .84$)													
17. 友人にはありのままの自分は出せない	.80	-.01	-.05	.04	.04	.01	.00	.01	-.12	.08	-.10	.62	防衛的
10. 友人と本音で話すのは避けている	.72	.00	.01	.01	-.02	.07	-.09	-.04	.09	-.07	-.04	.61	防衛的
28. 傷つきたくないのに、友人には本当の姿を見せられない	.72	-.11	.07	-.07	.05	.03	.04	.00	-.13	.03	-.03	.62	防衛的
8. 友人に自分のすべてをさらけ出すのは危険である	.68	.08	.04	-.02	-.01	.03	-.04	-.01	.08	-.02	.01	.51	防衛的
2. 友人とは本音で話さないほうが無難だ	.60	-.01	-.02	.09	.03	.05	.00	-.11	.06	-.06	.06	.43	防衛的
25. 友人とは、互いに傷つくような本音での話はしないようにしている	.49	.06	.07	-.10	.00	.04	.06	.04	.04	.03	.12	.34	防衛的
36. 友人には自分の考えていることを全部言う必要はない	.46	.04	-.07	-.02	-.01	-.16	-.07	.17	.14	-.14	.15	.34	防衛的
F02: 自己自信' ($\alpha = .81$)													
13. 友人と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない	-.03	.90	.03	.04	.08	.05	-.12	.04	-.07	-.01	.08	.69	自己自信
20. 友人と本音でぶつかり合っても、自信をなくしてしまうことはない	-.04	.80	-.02	.04	.02	.11	-.09	.03	-.01	-.04	-.01	.60	自己自信
4. 友人と意見が対立しても、自信を無くさないで話し合える	-.03	.71	-.04	-.02	-.02	.12	.00	-.04	.03	.01	.56	自己自信	
29. 友人と意見を交わしあっても、それほどまどわされない	.16	.57	.03	-.06	-.07	-.14	.09	-.07	.03	.04	-.05	.41	自己自信
40. みんなと意見が違っても、できるだけ自分の意見を言うようにしている	.06	.33	.00	.08	.03	-.28	.27	.03	-.01	-.01	-.06	.26	自己自信
F03: 全方向的' ($\alpha = .84$)													
1. どんな友人とも仲良くしていたい	-.05	-.02	.81	-.02	.02	-.04	-.07	.00	-.03	.00	.02	.61	全方向的
15. 友人と本音を言い合うことで、傷ついても仕方がない	.05	-.01	.78	.01	-.03	-.12	-.01	.05	-.04	.00	-.09	.65	全方向的
27. どんな人ともずっと友人でいたい	.01	.05	.75	.00	-.03	.03	.04	-.02	.02	.07	-.09	.61	全方向的
35. どんな友人とも協調し合いたい	-.01	-.03	.61	.04	.06	.05	.19	.05	.03	-.05	.07	.55	全方向的
F04: 積極的相互理解' ($\alpha = .80$)													
6. 友人と分かり合おうとして傷ついても仕方がない	.01	.04	-.01	.86	-.05	.09	-.10	-.03	.00	.09	.03	.66	積極的相互理解
15. 友人と本音を言い合うことで、傷ついても仕方がない	-.05	-.04	.01	.84	-.05	-.03	-.09	-.02	.06	.02	.09	.67	積極的相互理解
23. 友人と本当の姿を見せ合うことで、少しくらい傷ついてもかまわない	-.01	.04	-.01	.56	.05	.02	.18	.06	-.03	-.15	-.09	.51	積極的相互理解
31. 友人とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい	-.10	.03	.04	.38	.03	-.11	.30	.01	-.04	.04	-.05	.48	積極的相互理解
F05: 自己切替' ($\alpha = .79$)													
12. その場の雰囲気によって、自分のキャラ (性格) が変わる	-.03	-.01	-.02	-.03	.93	-.01	.01	-.04	-.01	-.04	.00	.82	
19. どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラ (性格) が変わる	.05	.00	-.01	-.04	.76	.03	-.01	-.02	.04	.05	-.03	.67	
37. 「明るく活発な私」と「物静かで落ち着いた私」というような矛盾するタイプの目標を、場合により使い分けている	.15	.06	.02	-.01	.42	-.02	-.04	.05	.07	.07	.10	.35	
F06: 同調' ($\alpha = .77$)													
7. みんなと何でも同じでいたい	.04	.00	.01	.01	-.05	.82	.15	.00	.12	-.03	-.12	.64	同調
21. みんなと違うことはしたくない	.11	-.02	-.07	.04	.00	.72	.07	.01	-.08	.06	-.09	.60	同調
32. みんなと意見を合わせようと思う	.03	-.15	.06	-.01	.10	.53	.08	.07	-.01	-.05	.06	.49	同調
F07: 一体化' ($\alpha = .56$)													
34. 友人とは何でも本音で話し合っているようにしている	-.30	.08	.09	-.02	.03	.04	.57	-.08	.08	.01	-.04	.58	☆防衛的
22. 友人が自分の他に誰と付き合っているのか、把握していると思う	-.04	.00	-.04	-.09	.03	.09	.45	.02	.04	.00	.03	.19	
53. 親しい友人とは、いつでも一緒にいたい	-.02	-.04	.07	.06	-.03	.09	.40	.11	-.02	-.02	.20	.31	
39. どんな悩みを打ち明けるときも、同じ友人に打ち明けている	.02	.00	.04	.03	-.06	.04	.36	-.05	-.13	-.03	.13	.16	
33. 自分の友人たちには、彼ら同士も友人であって欲しい	.09	.06	.26	-.04	-.08	.15	.34	-.02	.09	-.08	.03	.24	
F08: 被愛願望' ($\alpha = .88$)													
51. みんなに好かれていたい	-.03	.02	.08	-.03	-.02	.04	-.05	.87	.01	-.01	.01	.27	被愛願望
24. みんなから愛されていたい	.00	-.02	.06	.01	-.01	.00	.06	.82	.03	.04	-.07	.78	被愛願望
F09: 目的別対象切替' ($\alpha = .48$)													
5. 恋愛相談をする友人と、進路の相談をする友人は違うと思う	-.02	-.01	.03	.01	.02	.14	-.03	-.04	.54	.08	.04	.33	
21. 一緒に昼食をとる友人と、暇なときに遊ぶ友人とは違う	.13	-.12	-.04	-.02	.02	-.01	.07	.03	.41	.12	-.03	.23	
30. どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う	.12	.01	.02	.10	.08	-.15	.02	.11	.31	.13	-.02	.22	
F10: 状況離脱' ($\alpha = .52$)													
17. 何かと一緒にしていて相手のノリが悪いときは、相手を変えてみる	-.11	-.03	.01	-.04	.00	-.02	-.03	.03	.18	.59	-.01	.21	
14. 機嫌の良い日と悪い日とは、一緒にいたい友人が違う	.08	.06	.05	.13	.12	-.04	-.16	-.04	.17	.41	-.08	.29	
46. 友人に自分を理解してもらえないと自信がもてない	.03	-.15	-.04	.09	.07	.15	.14	.12	-.12	.37	.11	.81	☆同調
41. 自分が自信をなくされるくらいなら、友人とかかわらないほうがいい	.24	.06	-.07	-.08	-.06	.04	.06	-.10	.10	.33	.15	.46	☆防衛的
F11: 衝突回避' ($\alpha = .40$)													
43. みんなとぶつかり合うのは避けている	.11	-.08	.14	-.02	.02	.01	.04	-.04	-.07	.04	.59	.36	★防衛的
52. いやだなと思っている人とはつきあわないようにしている	.00	.09	-.21	-.05	-.04	-.12	.20	.02	.01	.12	.46	.42	☆全方向的
42. だれにでも好かれるのは無理だと思っている	.07	-.07	-.10	.20	.08	-.12	.08	-.06	-.06	-.18	.37	.41	★積極的相互理解
因子寄与	5.31	3.76	3.67	3.28	2.91	3.64	3.33	2.87	1.50	2.19	2.29		
因子間相関	F01	F02	F03	F04	F05	F06	F07	F08	F09	F10	F11		
F01	1.00	-.22	-.08	-.35	.39	.37	-.41	-.12	.23	.29	.39		
F02	-.22	1.00	-.19	.31	-.13	-.45	.18	-.17	.28	-.23	-.28		
F03	-.08	-.19	1.00	.12	.01	.26	.36	.50	-.11	.08	-.14		
F04	-.35	.31	.12	1.00	-.06	-.26	.37	.12	.08	-.07	-.22		
F05	.39	-.13	.01	-.06	1.00	.20	-.13	.12	.21	.36	.22		
F06	.37	-.45	.26	-.26	.20	1.00	.02	.14	-.12	.36	.25		
F07	-.41	.18	.36	.37	-.13	.02	1.00	.35	-.12	.08	-.29		
F08	-.12	-.17	.50	.12	.12	.14	.35	1.00	-.04	.19	.03		
F09	.23	.28	-.11	.08	.21	-.12	-.12	-.04	1.00	.06	.10		
F10	.29	-.23	.08	-.07	.36	.36	.08	.19	.06	1.00	.19		
F11	.39	-.28	-.14	-.22	.22	.25	-.29	.03	.10	.19	1.00		
$\alpha = .72$	RMSE=	.03											
回転前の累積寄与率は 69.78%	GFI=	.95											
	AGFI=	.91											
	CFI=	.97											

※ベース尺度項目については、最右欄にベース尺度での分類先を示した。ベース尺度とは異なる因子に分類されたものについては☆印を付した。またベース尺度では負荷量不足から除外されたものについては★印を付した。

TABLE 5 友人関係新規尺度 二次因子分析 (n=999)

	FF1	FF2	FF3	h ²
FF1: 「防衛・切替」				
F01: 防衛的	.70	-.24	-.18	.71
F09: 目的別対象切替	.65	-.09	.62	.58
F05: 自己切替	.64	.10	.07	.38
F10: 状況離脱	.62	.37	-.10	.50
F11: 衝突回避	.43	-.18	-.27	.39
FF2: 「広さ」				
F07: 一体化	-.14	.79	.25	.77
F03: 全方位的	.03	.64	-.16	.43
F08: 被愛願望	.14	.63	-.05	.40
FF3: 「深さ」				
F02: 自己自信	-.01	-.07	.80	.66
F06: 同調	.35	.32	-.52	.59
F04: 積極的相互理解	-.07	.34	.50	.39
因子寄与	2.37	1.94	2.06	
因子間相関				
FF1	1.00	-.17	-.32	
FF2	-.17	1.00	-.02	
FF3	-.32	-.02	1.00	

回転前の累積寄与率は 65.24%

度「FF2: 広さ」と同じ性質を持つ軸であると考えられたため「FF2: 広さ」と名付けた。先行研究から設定した下位概念「関係の相互隔離」の逆項目からなる「F07: 一体化」であるが、この下位概念は状況に応じるか否かを前提としない点で他の下位概念と異なっており、因子間相関(前掲TABLE 4)を見ても他の新観点下位概念の因子(以下「新観点因子」とは関係が薄かった。第3二次因子には、「F02: 自己自信」、「F06: 同調」、「F04: 積極的相互理解」と、ベース尺度「FF1: 深さ」と同じ一次因子のみが揃ったため「FF3: 深さ」と名付けた。一次因子分析と二次因子分析の結果を元に高次因子分析モデルを構成し、検証的因子分析を行ったところ、モデルの適合度は、RMSEA=.05, GFI=.87, AGFI=.85, CFI=.86と許容される範囲の値が得られ、探索的二次因子分析で得られた因子構造のデータへのあてはまりの良さが確認された。

以上、堅牢な因子構造をもつ落合・佐藤(1996)の35項目に新観点項目を加えて因子分析を行った結果から、既存観点・新観点は因子的に弁別可能であること、また新観点を取り上げることにより友人関係は深さ・広さの2次元では整理されず3次元で整理されることが確認された。この結果は、新観点を取り上げない場合、友人関係の構造を過度に単純化して捉えてしまう可能性を示している。但し、見出された高次因子構造は単純解には遠く、3次元での分類も実用的なものであるとはやや考え難い。そこで以降の分析は、二次因子で

なく一次因子の因子得点を用いて進めてゆく。

3. 心理的ストレス反応経験頻度尺度の構成

全18項目に対し最尤法による因子分析を行い、挟み込み法により2~7因子解から3因子解を採用、Promax回転を施した(TABLE 6)。原型尺度、今回ともに複数負荷となった項目(項目6, 7, 12)に移動がみられた以外は、鈴木他(1997)と同様の因子構造が得られた。そこで因子の解釈と命名は鈴木他(1997)に準拠し、第1因子「抑うつ・不安」、第2因子「無気力」、第3因子「不機嫌・怒り」と名付けた。

4. 友人関係と心理的ストレス反応経験頻度との関連

心理的ストレス反応経験頻度尺度の各因子得点を目的変数、ベース尺度の各因子得点、および新規尺度の各因子得点を説明変数とし、強制投入法による重回帰分析⁵を行った(TABLE 7, 8)。自由度調整済み重決定係数によって⁶目的変数への予測力を比較したところ、全ての目的変数に対して、新規尺度からの予測力はベース尺度からのそれを上回った⁷。この結果は、友人関係から心理的ストレス反応経験頻度を予測する力が、捉え直しにより向上することを示している。

標準偏回帰係数 β に着目すると、新観点からストレス反応への有意な正の β が目立つ。一方、既存観点では、「F1: 防衛的」、「F6: 被愛願望」と全目的変数との組み合わせで示された有意な正の β 6つの内4つが新規尺度では有意ではなくなること、また、「抑うつ・不安」に対して、「F5: 同調」では有意でない一方「F06: 同調」では有意な負の β が示される等、新観点による統制の有無により、既存観点と心理的ストレス反応経験頻度との関連が変化することが見て取れる⁸。この結果は、既存観点のみで友人関係を捉えて他の変数との関係を見た場合、新観点を剰余変数とする擬似相関・擬似無相関により結果が歪められてしまう危険の存在を明らかにしており、この捉え直しが単なる観点拡張にとどまらず、既存観点についての知見を

⁵ 多重共線性の影響に関しては、説明変数間の相関が中程度であること($r \leq |.53|$)、 β 係数値が妥当な範囲内であること($\beta \leq |.21|$)、各変数のVIF値の許容度に特に低い値が見られなかったことから、問題なしと判断した。

⁶ 説明変数の数が異なるため、自由度を調整(石村, 1992)した。

⁷ 校種・性別に分析した場合も本文と同じ結果となる。但し大学生男子の「不機嫌・怒り」に限っては、ベース尺度、新規尺度とも自由度調整済み重決定係数が有意でなかった。

⁸ より直接的に、心理的ストレス反応経験頻度の各因子を従属変数、新規尺度の既存観点因子を独立変数とし、他の既存観点因子のみ制御した場合と、新観点因子をも制御した場合との偏相関係数により検証しても同じ結論に至る。

TABLE 6 心理的ストレス反応経験頻度尺度 (n=999)

	F1	F2	F3	h ²
F1: 抑うつ・不安 (α=.85)				
5. 泣きたい気持ちだ	.85	-.09	-.01	.62
2. 悲しい気分だ	.82	-.07	.06	.65
9. 気持ちが沈んでいる	.59	.21	.07	.61
3. 何となく心配だ	.53	.17	-.01	.42
15. なぐさめて欲しいと思う	.45	.27	-.07	.38
6. 感情を抑えられない状態だ	.36	.07	.30	.39
7. くやしい思いがする	.31	.20	.20	.36
F2: 無気力 (α=.81)				
16. 根気がもてないでいる	.01	.69	-.06	.45
18. 何かに集中できない状態だ	-.06	.66	.03	.40
14. 話や行動がまとまらない状態だ	.04	.60	.06	.43
11. いろいろなことに自信がもてない状態	.33	.50	-.06	.52
13. よくないことを考える	.24	.48	.01	.44
12. 何もかもいやだと思う	.18	.38	.24	.45
17. ひとりでいたい気分だ	.01	.33	.16	.19
F3: 不機嫌・怒り (α=.84)				
4. 怒りを感じる	.04	-.08	.86	.71
1. 怒りっぽくなる	.02	-.11	.81	.60
10. いらいらする	-.05	.19	.73	.66
8. 不愉快だ	.03	.24	.51	.46
因子寄与	5.48	5.14	4.56	
因子間相関		F1	F2	F3
	F1	1.00	.63	.52
	F2	.63	1.00	.48
	F3	.52	.48	1.00
α=.91			RMSEA=	.07
回転前の累積寄与率は56.51%			GFI=	.93
			AGFI=	.89
			CFI=	.94

TABLE 7 ベース尺度から心理的ストレス反応経験頻度への重回帰分析結果 (n=999)

	FF1:「深さ」				FF2:「広さ」		R ²
	F1: 防衛的	F2: 自己自信	F4: 積極的相互理解	F5: 同調	F3: 全方位的	F6: 被愛願望	
抑うつ・不安	.18**	-.15**	.15**	.03	-.15**	.21**	.08**
無気力	.16**	-.21**	.17**	.06	-.12**	.11**	.09**
不機嫌・怒り	.15**	-.01	.08*	.12**	-.21**	.10*	.06**

表中の数値は標準偏回帰係数。R²は自由度調整済み重決定係数。
説明変数は二次因子分析での分類順に記載した。

*p<.05 **p<.01

TABLE 8 友人関係新規尺度から心理的ストレス反応経験頻度への重回帰分析結果 (n=999)

	FF1:「防衛・切替」					FF2:「広さ」			FF3:「深さ」			R ²
	F01: 防衛的	F09: 目的別対象切替	F05: 自己切替	F10: 状況離脱	F11: 衝突回避	F07: 一体化	F03: 全方位的	F08: 被愛願望	F02: 自己自信	F06: 同調	F04: 積極的相互理解	
抑うつ・不安	.16**	-.02	.12**	.14**	.08*	.13**	-.12**	.10*	-.18**	-.12**	.10**	.13**
無気力	.08	-.06	.18**	.14**	.11**	.05	-.06	.00	-.18**	-.08	.13**	.15**
不機嫌・怒り	.08	.03	.10**	.19**	.08*	.14**	-.17**	.01	-.04	-.04	.02	.12**

表中の数値は標準偏回帰係数。R²は自由度調整済み重決定係数。
説明変数は二次因子分析での分類順に記載した。

*p<.05 **p<.01

見直していく上でも有意義であることを示している。

「F 05：自己切替」は新規作成項目のみの因子であり、既存観点の内では「F 01：防衛的」、 「F 06：同調」との因子間相関が比較的高い。従ってベース尺度「F 1：防衛的」、 「F 5：同調」は自己切替の成分を含んでいる。これが分離された「F 01：防衛的」、 「F 06：同調」ではストレス反応との関連が弱まり、あるいは負の β が見られるようになることを考えると、表面的な付き合いにとどめることや周囲に合わせる付き合い方は、自己のあり方を切り替える必要を伴うことによりストレスを高めるのではないか。

「F 10：状況離脱」と「F 11：衝突回避」は、いずれも「F 1：防衛的」の項目を含む新規抽出因子である。項目内容を見ると、本音を出して傷つくことを恐れる心性は共通しているが、「F 01：防衛的」では表面的な付き合いにとどめることで関係が維持されるのに対し、「F 10：状況離脱」と「F 11：衝突回避」では関係の取捨選択がなされる。 β から見る限り、表面的な付き合いにとどめる者よりも、表面的な関係は切り捨てる者がよりストレスを抱えていると考えられる。

新観点の内、「F 09：目的別対象切替」のみはストレス反応への有意な β を示さなかった。Buss(1987)になれば、他の「F 05：自己切替」等は状況から個人への影響、目的別対象切替は個人から状況への選択・操作として、即ち作用の方向が異なるものとして対置できる。このことが内的-外的統制信念(Rotter, 1966)や自己原因性感覚(deCharms, 1968)の差異となり、双方の働きを異ならせているのではないかと考えられる。

最後に新観点導入後のTABLE 8に拠って友人関係と心理的ストレス反応との関連の様相について見ておく。本稿冒頭で挙げた友人関係の希薄さの特徴である「F 01：防衛的」、 「F 11：衝突回避」は心理的ストレス反応経験頻度と正の関連を、希薄でないことを表す「F 02：自己自信」は負の関連を示した。これらは、希薄な友人関係によるストレスという従来の見方(前掲少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議, 2001)を支持する結果である。しかし一方で、希薄さの特徴である「F 06：同調」が負の関連、希薄でないことを表す「F 04：積極的相互理解」が正の関連を示すという、従来の見方とは逆の結果も見られた。関連の方向を同じくする付き合い方の共通点を探ると、傷つき・傷つけられることが想定されるほど高い心理的ストレス反応経験頻度を伴い、想定されないほど低い心理的ストレス反応経験頻度を伴うことが読み取れる。即ち、傷つき・傷つけられることを避けるか否かにかかわらず、

傷つき・傷つけられることが想定されるか否かがストレスとの関連の方向を左右している。この結果は、友人関係が希薄か否かはストレス反応を予測・説明する要因として有力でないことを示唆しており、一概に希薄な友人関係を否定し希薄ではない友人関係を推奨する指導・支援の実効性には疑問があること、寧ろ指導・支援者の意図とは逆の効果を招いている危険もあることを示すものであった。

討 論

本研究の結果から、新観点＝友人関係において状況に応じて関係対象や自己のあり方を切り替える付き合い方は、従来の深さ・広さの2次元では整理されないものであることが明らかとなった。また、新観点を含めて友人関係を捉え直すことにより、他変数への予測力が向上すること、新観点による統制の有無により既存観点と他変数との関連に変化がみられることが明らかとなり、捉え直しは単に可能なだけでなく積極的意義をもつことが示された。

また、ベース・新規いずれの友人関係尺度においても二次因子分析の適合度指標の値が必ずしも高くなかったこと、および、同じ二次因子に分類される一次因子間でもストレス反応との関連が異なること(前掲TABLE 7, 8)からは、2次元にせよ3次元にせよ、友人関係を捉える枠組みとしては大まか過ぎるのではないかと考えられる。友人関係研究は現在、関連研究で得られた知見に基づいて友人関係の構造を再検討する必要があるとされている(落合・竹中, 2004)。その際、状況に応じた切替に注意を払うこと、および大枠への分類を急がず慎重に検討を進めること、以上2点の必要性が本研究の結果から主張される。

心理的ストレス反応経験頻度との関連については、今後の検討に委ねる部分が大きい。因果の方向を問えない横断調査であるため、心理的ストレス反応を招きやすい付き合い方であるのか、コーピングとして選択されやすい付き合い方であるのかとの議論には答えられない。また、それぞれの付き合い方が、教育上、あるいは精神衛生上適応的なものであるか否かといった評価は、経験頻度のみでなくストレスの質をあわせて論じなければならない。重決定係数の値が全体に低めであったことも考慮すると、慎重に検討していく必要がある。また、本研究で探索的に構成した新規尺度には、項目数のアンバランス、 α 係数の低さといった問題がある。今後、項目数・項目内容の整理改善によって精度を高めていかねばならない。このような限界は

持つものの、希薄な友人関係→ストレス→問題行動という認識に基づいた従来の指導・支援が孕む危険と、指導・支援の再検討に際して状況に応じた切替に注目することの有益性を実証的に示したことは、本研究の大きな成果である。

ところで、本研究では友人関係の諸側面について個別に検討してきた。しかし例えば、状況に応じた切替をする傾向の高い者の中にも、深い付き合いから浅い付き合いまでに亘って切り替えている者もあれば、常に深い付き合いに限定するため、あるいは常に浅い付き合いに限定するために切り替えている者もあるであろう。今後そうした違いに迫るためには類型論的な検討も必要と考える。但し先述の通り、同じ二次因子に分類される一次因子間でもストレス反応との関連が異なったという結果からは、類型化およびその解釈の際には十分な慎重さが必要と考えられる。

引用文献

- 浅野智彦 1995 友人関係における男性と女性 川崎賢一・芳賀学・小川博司(編) 都市青年の意識と行動—若者たちの東京・神戸90's [分析編] 恒星社厚生閣, Pp.53-66.
- 浅野智彦 1999 親密性の新しい形へ 富田英典・藤村正之(編) みんなぼっちの世界—若者たちの東京・神戸90's・展開編— 恒星社厚生閣, Pp.41-57.
- Buss, D. M. 1987 Selection, evocation, and manipulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1214-1221.
- 大坊郁夫 2003 青年の対人コミュニケーション状況と社会的スキル 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, 14-15.
- deCharms, R. 1968 *Personal causation: The internal affective determinants of behavior*. New York: Academic Press.
- 藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳 1996 小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究—全国9都県での質問紙調査の結果より— 東京大学大学院教育学研究科紀要, **36**, 105-127. (Fujita, H., Ito, S., & Sakaguchi, R. 1996 The structure of peer relations and identity of pupils: Based on the questionnaire survey data collected in 9 prefectures. *Bulletin of the Graduate School of Education, the University of Tokyo*, **36**, 105-127.)
- 堀 啓造 2004 因子分析における因子数決定法—MAPと平行分析(PA-SMC95)による挟み込み法— 日本心理学会第68回大会発表論文集, 391.
- 石村貞夫 1992 すぐわかる多変量解析 東京図書
- 伊藤美奈子 1999 長沼・落合論文「同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係」に対する私論 青年心理学研究, **11**, 63-66. (Ito, M. 1999 Comment on NAGANUMA and OCHIAI's article. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **11**, 63-66.)
- 香山リカ 2004 就職がこわい 講談社
- 梶田叡一 1970 両親との葛藤状況における子どもの反応様式—反応様式の構造および若干の規定因について— 心理学研究, **41**, 67-77. (Kajita, E. 1970 Response style of children in the conflict situation with their parents on the structure of response styles and some determinants of them. *Japanese Journal of Psychology*, **41**, 67-77.)
- クラエエ, B. 堀毛一也(編訳) 1996 社会的状況とパーソナリティ 北大路書房
- リフトン, R. J. 外林大作(訳) 1971 誰が生き残るか 誠信書房
- 長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, **10**, 35-47. (Naganuma, K., & Ochiai, Y. 1998 Friendship in adolescence from the view point of association. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **10**, 35-47.)
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55-65. (Ochiai, Y., & Satoh, Y. 1996 The developmental change of friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **44**, 55-65.)
- 落合良行・竹中一平 2004 青年期の友人関係研究の展望—1985年以降の研究を対象として— 筑波大学心理学研究, **28**, 55-67. (Ochiai, Y., & Takenaka, I. 2004 Adolescent friendship: A review of studies since 1985. *Tsukuba Psychological Research*, **28**, 55-67.)
- 岡田 努 1993 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, **5**, 43-55. (Okada, T. 1993 Friendship in contemporary adolescents. *Japanese Journal of Adolescent Psychology*, **5**, 43-55.)

- 小此木啓吾 1980 シゾイド人間—内なる母子関係をさぐる— 朝日出版社
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 280-290. (Oshio, A. 1998 Relationship among narcissistic personality, self-esteem, and friendship in adolescence. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 280-290.)
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, **80**, 1-28.
- 少年の問題行動等に関する調査研究協力者会議 2001 心と行動のネットワーク—「心」のサインを見逃すな, 「情報連携」から「行動連携」へ—
- 鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬楚力也・坂野雄二 1997 新しい心理的ストレス反応尺度(SRS-18)の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, **4**, 22-29. (Suzuki, S., Shimada, H., Miura, M., Katayanagi, K., Umamo, R., & Sakano, Y. 1997 Development of a new psychological stress response scale (SRS-18) and investigation of the reliability and the validity. *Japanese Journal of Behavioral Medicine*, **4**, 22-29.)
- 富田充保 2000 青少年と人間関係—その行く末と課題— 門脇厚司・久富善之(編) 現在の子どもがわかる本—日本教育学会課題研究「変化する社会と子どもの異変」報告書— 学事出版, Pp.229-251.
- 辻 大介 1999 a 若者語と対人関係—大学生調査の結果から— 東京大学社会情報研究所紀要, **57**, 17-42. (Tsuji, D. 1999 Young people's new speech style and their interpersonal relationship : The results of a preliminary survey on university students. *Bulletin of the Institute of Socio-Information and Communication Studies, the University of Tokyo*, **57**, 17-42.)
- 辻 大介 1999 b 若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア 橋元良明・船津 衛(編) 子ども・青少年とコミュニケーション—シリーズ・情報環境と社会心理 3— 北樹出版, Pp.11-27.
- 和田 実 1990 青年の対人関係の変容 久世敏雄(編) 変貌する社会と青年の心理 福村出版, Pp.83-102.

謝 辞

本論文は滋賀大学大学院教育学研究科に提出した修士論文(2005年度)の一部を加筆・修正したものです。また,本研究の一部は日本教育心理学会第47回総会において発表されました。

本論文の作成にあたり,滋賀大学の若松養亮先生に懇切な御指導を賜りました。深く感謝申し上げます。また,調査に御協力頂きました生徒・学生の皆様,先生方に,厚く御礼申し上げます。

(2006.5.12 受稿, '07.5.15 受理)

APPENDIX 友人関係尺度の新規作成項目

下位概念	項目
対象切替	5. 恋愛相談をする友人と、進路の相談をする友人とは違うと思う
	14. 機嫌の良い日と悪い日とは、一緒にいたい友人が違う
	21. 一緒に昼食をとる友人と、暇なときに遊ぶ友人とは違う
	30. どこに何をしに行くかによって、最初に誘う友人は違う
	(R)39. どんな悩みを打ち明けるときも、同じ友人に打ち明けている
	47. 何かを一緒にしていて相手のノリが悪いときは、相手を変えてみる
(R)53. 親しい友人とは、いつでも一緒にいたい	
自己切替	3. 相手のノリに合わせて話題を選ぶ
	12. その場の雰囲気によって、自分のキャラ（性格）が変わる
	19. どんな友人と一緒にいるかによって、自分のキャラ（性格）が変わる
	26. 自分がボケ役に回るかツッコミ役に回るかは、相手しただ
	37. 「明るく活発な私」と「物静かで落ち着いた私」というような矛盾するタイプの目標を、場合により使い分けている
	45. 自分が生き方の目標や手本にしている人たちは、タイプが色々なので、ひとつのイメージにしぼるのは無理だと思う
(R)49. 同じ友人に対する私の距離のとり方は、そうそう変わることはないと思う	
関係の相互隔離	11. いろいろな友人と付き合いがあるので、その友人たちは知らないもの同士だ
	(R)22. 友人が自分の他に誰と付き合っているのか、把握していると思う
	(R)33. 自分の友人たちには、彼ら同士も友人であって欲しい
	44. 友人との付き合いに、他の友人との関係は持ち込まないようにしている

注：文末否定表現を避けるため逆転項目（「(R)」を付した）として作成した項目があるが、本尺度は項目得点平均等の使用を想定しない。従って因子分析に際しては、点数の反転処理は行わず、項目表現への反応そのものを投入した。

Situational Changeovers in High School and University Students' Relations With Friends : Correlation With Psychological Stress Response

MUNEHIRO OHTANI (GRADUATE SCHOOL OF SOCIOLOGY, KANSAI UNIVERSITY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2007, 55, 480-490

High school and university students' relations with friends have been previously described in terms of the dimensions of depth and extent. The present study re-examined those relationships. Participants completed a questionnaire developed from the viewpoint of changeovers according to situations, which was expected to reveal a new perspective on their relations with friends. Factor analysis showed that this new viewpoint could be distinguished from the existing factor as another dimension, and that, in that context, a two-dimensional explanation using only depth and extent is not appropriate. Furthermore, multiple regression analysis revealed that the viewpoint of changeovers according to situations enabled improved adjusted R-squared predictions of the psychological stress response. A large number of different partial correlation coefficients between before and after were obtained, adding the new factor scores as explanatory variables.

Key Words : situational changeovers, relations with friends, interpersonal relations, communication, adolescence